

気づいて一歩ふみだすための人権シリーズ ①

そんなの気にしない

— 同和問題 —



人権問題は難しい問題ととらえられがちですが、実は身近な生活のなかにひそんでいます。日常の、なにげない一言や行動の中にその芽があります。人権の基本は、相手を思いやり大切にすること、そして、自分の尊厳も守り大切にすることです。こうしたことは、「人権」だとあらためて考えなくても、私たちの日常生活や社会生活・職業生活の上で意識していきたいものです。このシリーズは、テーマごとの人権課題をとりあげ、その人権課題をドラマで掘り下げていくことで、そこにある人権を意識し、気づき、そして、視聴者それぞれが明日の自分のために一歩ふみだせるよう工夫し構成したものです。

この作品は、二人の友だち同士が主人公です。タイトルの「そんなの気にしない」は、親友に自分が同和地区出身だということを告白したときに返ってきた言葉です。告白したほうは、相手にもっと知って欲しかった。告白されたほうは相手が、そのままの相手でも何も変わらないことを伝えたかった。しかし、その一言がきっかけで二人はすれ違っていきます。プラスのイメージを持っていることに、人は「気にしない」とは言いません。「気にしない」という言葉の底には、そのことをマイナスに見る意識があるのかもしれない。私たちが普段なにげなく使う言葉や態度のなかには、相手を傷つけるものがあるかもしれない。そして、壁を乗り越えるのもまた、相手を信じる力だということを作品で伝えたいと思います。

上映時間17分 [C#3204]

DVD 本体価格 66,000円(税抜)

解説書・チェックシート付き

字幕・副音声版付き



東映株式会社 教育映像部

〒104-8108 東京都中央区銀座3-2-17
<http://www.toei.co.jp/edu/>

そんなの気にしない

— 同和問題 —

ストーリー

CHAPTER① 「あの時」

香坂丈史と佐藤光太は、高校時代のサッカー部のチームメイトで親友だった。高校を卒業したあと丈史は東京の大学に進学し、今は住宅販売会社のリフォーム部門で働いている。入社6年目の今年、丈史は東京本社から故郷の町にある支店へと異動した。ある日、光太が自宅のリフォームの相談をするために丈史の勤めている支店を訪れた。不意の再会を二人は驚く。二人は、高校を卒業してからお互いに連絡を取っていなかった。丈史は、卒業式の前日にグラウンドで光太と話をしたことを思い出す。東京に行く丈史に、光太は、自分が被差別部落の出身であることを告白する。それに対し、光太は、丈史への思いやりととまどいを同時に含むように「そんなの気にしない」と答えた。その言葉を最後に、二人の間に言葉が交わされることがなかった。



CHAPTER② 「ここから」

丈史は、職場で上司や職場の同僚と話をするなかで、自分がかつて光太と交わした言葉の意味を改めて考える。そして、光太に会いに行くことを決意する。

10年前、卒業式の前日に会話を交わしたグラウンドで、光太は水をまいてグラウンド整備していた。丈史は光太に話しかける。あの時、どうして自分は「そんなの気にしない」って言ったのか。なぜその先の光太の話を聞けなかったのか。光太も答える。「光太は光太、何も変わらない」という意味で丈史が言ってくれたということが、今ならわかる。しかし、あの時には丈史が自分に無関心なのだと思え、悲しかったのだと。再会した二人は、離れてしまったお互いの距離を埋めるよう、言葉と言葉を重ねていく。



プロデューサー 中鉢裕幸

新井英夫

脚本 山上梨香

撮影 菊池 亘

監督 CLOVER GREEN

制作協力 ㈱ターゲット

企画・制作 東映株式会社 教育映像部